

II 博士論文紹介 II

野口尚志 著『太宰治・初期作品の展開』

《論文構成》

序章

第I部 小説と小説家の模索

第一章「猿面冠者」論

——同時代の〈作家〉表象との関わりから——

第二章「ロマネスク」論——〈浪漫〉言説との関わりから——

第三章「めくら草紙」論(一)——太宰治と象徴主義——

第II部 初期作品の展開

第一章「魚服記」論——テクストの相剋の萌芽として——

第二章「葉」論——〈不安〉と断章——

第三章「めくら草紙」論(二)

——横光利二「純粹小説論」との対立——

第四章「秋風記」論——〈空虚〉な「私」はどこへ帰ったか——

終章

昭和初年代、主流となる文学上の方法論が失われる時期において、太宰作品には〈メタフィクション〉が多く見られる。著者は本論文において、主にそうした作品を取り上げ、自然主義やプロレタリア文学が自明視していた小説観からの脱却をはかる太宰は、どのような表現主体と表現方法を形成したかを捉えることを目的としている。

まず、作中の作家表象が表現を生み出すために、どのような模索

を行ったかが考察されている。「猿面冠者」や「ロマネスク」は主流となる方法論喪失後の作家の戸惑いを端的に表している。「めくら草紙」において作品を支配するものとしての小説家像は終焉し、小説家は象徴主義的方法をとることで、〈文学の本質〉としての「ポエジイ」を言語化して提示するだけの限りなく無為な媒体へと転移し、読者によって意味の生成をはかる創作現場を開示している。第II部では表現方法に注目して論じている。引用やコーラージュの方法が用いられた「魚服記」、意識的に断片が並列された「葉」、更に「めくら草紙」に至って、フランス象徴主義的な、言葉の断片と断片との響き合いを狙う方法へと収斂したと著者が指摘している。「めくら草紙」において太宰は横光利一の「純粹小説論」(『改造』昭和10・4)の「純粹小説」を拒否し、流行に動じずに新たな表現へ突き抜けようとする方法意識を固持していた。「秋風記」では象徴主義の受容の仕方が再考されている。このように初期の太宰作品は、その文学観・方法論共に大きなゆらぎを見せている。そのゆらぎは象徴主義を応用した小説へと徐々に形をなしていく。敢えて表現主体と小説言語の〈空虚〉を求めていくその手法の影響によって、太宰の作品は特定の時代相から解き放たれた普遍的な文学性を持つことになったと著者は述べている。

本論文は作品の読みと同時代状況の考察によって堅実な論となっている。今後の太宰研究の重要な布石となるだけでなく、昭和初期の文学研究にも多くの示唆を与える論考となるに違いない。

(王菁潔)